子どもと造形

児造研ニュース

児童造形教育研究会機関紙

編集・発行人 長尾宏一

事務局 〒111-0051

台東区蔵前3 - 20 - 2 クレパスビル内 03(3862)3937

第30回児童造形教育研究集会 「子どもたちから始まる造形教育 みんなでつくることの意味 Part ...

夏の研修会を終えて

児童造形教育研究会 会長 長尾 宏一

この夏、8月9日に本会主催の研修会が江戸東京博物館を会場に行われ、全国各地から参加いただき、心より感謝申し上げます。

今回の研修会は、「子どもたちから始まる造形教育 - みんなでつくることの意味 Part - 」をテーマに 図画工作価値とその学習活動はどうあるべきなのかを 皆さんで探りたいと考えました。

本運営委員会の実践における子どもたちの造形活動の様子をもとにパネルディスカッションを行いましたが、いかがだったでしょうか。私たちが理論を言葉で話すよりも、子どもの活動や表情、言葉などから感じ取ることの方が分かりやすかったのではないでしょうか。

学校で子どもたちが、一緒になって表現することには、大事な意味があることを改めて確認することができました。だだ、みんなで表現に取り組む、その考え方を取り間違えると大きなマイナスの活動になってしまうことを肝に銘じなければならないと感じました。特定の者の考えに流されることなく自分の考えを示すこと、子どもたちが個々のよさを認め合い、発揮し合うことなどが前提にあり、お互いの力を高めていくのではないでしょうか。







実技研修は、4つのコースに分かれて行われましたが、皆さん熱心に取り組まれ、素敵な作品や活動に私 もすっかり感心してしまいました。

私が担当したスチレンボード版画では、大きな紙に それぞれの版を写すことに取り組んでいただきまし た。お互いに版の形や色合いを味わいつつ、表現を発 展させていく姿が印象的でした。

たくさんの活動をおみやげにしていただき、子ども たちのために生かしていただければ、私たち運営委員 にとってこれ以上の喜びはありません。

そして、今回も「ざっくばらん討論会」を行い、テーマに関わると、先生方が普段実践していて困っていることなどを話し合いました。その中で、先生方の今後の実践につながる内容を見つけることができたらよいのですが、いかがだったでしょうか。討論会で話題になったことやアンケートで質問をいただいたことに、今回のニュースで、できるだけお答えしたいと思います。参考になれば幸いです。

結びに、研修会にご参加いただいた先生方に感謝申 し上げ、御礼にかえさせていただきます。また、来年 もお会いできることを楽しみにしております。

研究全体会(パネルディスカッション)

「みんなでつくることの意味」って何???

進 行:林 耕史(筑波大付属小学校) パ 初 れ:平田智久(十文字女子大学教授)

橋本光明(信州大学教授)

長尾宏一(戸田市立芦原小学校教諭)



今回のパネルディスカッションは,メインテーマである「子どもたちから始まる造形教育」という考え方を,参会された先生方と検討し合い共有することを願って企画されました。

私たち教師は、「学校」とは自明のもので、そこで図画工作の学習指導をするということは当たり前のように思っています。ところが、ご存じのように世界には「図工」なり「美術」なりの内容を義務教育に組み込んではいない国もあるのです。そこから逆に考えると、なぜ日本では図工・美術を初等・中等教育に位置づけているのか、という重要性がおわかりになると思います。

今回のパネルディスカッションでは,子どもたちの造形活動の姿をビデオ映像などで具体的に見ながら,本会の長尾,橋本,平田の三氏がそれぞれの「みんなでつくることの意味」を述べました。

まず粘土を扱う同一題材に見られる子どもたちの姿を,個別で進めたクラスと「みんなでやってみよう」と場を拡大したクラスとの対比を通して検証しました。同じ題材でありながら,子どもたちの活動・姿に大きな違いが現れたのをご覧になったと思います。

次に , 一人の子を中心にして「見立てて描く」題材における友だちとのかかわり合いについて見ました。個別の活動でも , 友だちとの様々なかかわり合いによって活動が展開される様子が確認できました。

最後は、幼稚園の子どもの姿から、「まねる」というかかわり合いに焦点を当てたディスカッションになりました。「まねる」の中にも自分なりに友だちのよさを吸収したりヒントにしたりしながら自分を成長させている姿が現れていることに注目しました。「まねしちゃダメよ」と言って、みな違う表現で見栄え良く見える作品群を展示している園の壁面から、むしろ保育者の都合で子どもに作業を強いている面が伺える点については、パネラー三氏から問題を指摘する声があがりました。

これら映像資料を見ながらの討議では、パネラー三氏は三様の意見を展開しました。しかし、このディスカッションを通して「みんなでやらなければならない」という結論を導き出したということではありません。結論は、むしろ参会の先生方に返され託されたと言っていいでしょう。既に、参加された先生方は、午後の実技研修からも、「個人」の表現活動を深める指導を大切にしながらも、「学校」「学級」で造形教育をするという意味と価値を再確認なさっていると思います。

参会の先生方ご自身が「みんなで作ることの意味」を感じ取りながら過ごす一日であったことを思うと,その指針を与えてくれる1時間として,このパネルディスカッションは貴重な意義があったと思います。

(林 耕史)

<u>A コース:「挑め!ダンボール」「夏のヤブレター」</u>

「紙」を中心とする造形活動で、「紙との出会い」「活動のきっかけづくり」「具体的な実践例」などについて話し合いや実技を展開しました。

参加者の日頃の悩みや疑問に思うことなどを伺い、自 分の経験や体験をもとにお話できたことをとてもうれし く思いました。私自身にも新鮮な経験となりました。

幼児や小学校低学年向け実技研修を毎年やってきました。年々、参加者が少なくなってきましたが、幼児、低学年の実技は基礎・基本の「基」です。来年度もこのコースを担当することになると思います。

参加された皆様を心をこめてお迎えできるよう、私自身 研鑽を重ねてまいりたいと思います。ありがとうござい ました。 (中村哲夫)



<u>B コース:「ほって、けずってひらめいて」</u> 「白い形を切ったり、つなげたり...」

前半は北川智久先生の提案で土粘土を使った題材が提案されました。はじめに粘土を糸や針金などを使って切りました。ステンレスのスプリングで切った切り口が面白い形になることが分かり、参加者も試しに切ってみました。次に、高く積み上げたり、お団子をたくさん作ったり、2分間で競争をしました。手を使いながら、粘土のことがよく分かる話を聞いていくうちに体も心も頭もほぐれてきたようでした。和やかな雰囲気ができてくる中で「グアナコ」という名前の動物を想像を広げならっくる題材が提案されました。一人一人が全くちうがらつくる題材が提案されました。一人一人が全くちうがけになったようです。また、一緒に活動しているお子様の表現や発想の面白さに参加者の先生方から称賛の声が挙がっていました。

二つ目の題材は指やかき取りべラなどで大きな粘土の固まりから粘土を削りだしたり、穴をあけていく「ほって けずって ひらめいて」という題材です。2~3人のグループになって大きな粘土の塊に挑んでいました。参加者の先生方がさらにうちとけて会話が弾む姿が見られました。午前中の全体会でも児童が活動していたVTRが流されたため、子どもの気持ちになって「みんなでつくることの意味」を体験できたようでした。活動をしながら、製作方法や、評価方法などについて北川先生より丁寧に具体的な方法が話されました。



後半は安倍がコーンスターチでつくられた緩衝材を使 って活動する「白い形を 切ったり つなげたり」とい う題材を提案しました。初めて見る材料という先生方が 多く、どこで購入できるかという問い合わせが多く寄せ られました。また、水で湿らせるだけで接合できるとい うことも新鮮な驚きがあったようです。 前半の北川先 生の活動でかなりの集中力でつくっていた参加者の先生 方、「果して後半までもつのかな?」と心配していたので すが、大変ながんばりようで、後半の活動もつくり方の 発想を広げながら熱心に活動に挑んでおられました。こ こでも一緒につくっているお子様の活動に大人が考えよ うもない面白い表現が見られ「先生方もすごいけれど、 子どもの表現もすごいなあ。」と思わずにはいられません でした。 (安倍啓斎)

<u>C コース:「つくろう!カラフル・マンション」</u> 「筆じゃなくてもかけるんだ!」

Cコースでは絵に表す活動の講座が開催されました。 といっても風景画や空想表現ではなく「表現方法」に着 目した題材2つです。今回は「みんなで図画工作を行う 意味」について考えることがテーマでしたので、Cコー スでも平面に表す表現方法をもとにみんなでやることの 意義を考えながら進められました。

前半は段ボール板にローラーで白と黒の世界を表現していきました。受講生の皆さんはローラーを駆使しながらどんがん表現をしていきます。このときも周りの方の表現のおもしろさを感じていらっしゃる様子がよくわかります。1人でやっているようでも実はみんなでやっているということが体感できたようです。





次は段ボール板の裏面にいろいろな色を使って同じよう にローラーで表現することをおこないました。表面では 色数が限定されて

いた分ローラーの技法に目がいっていた受講者のみなさんもカラフルな色や形のよさを感じながら表現を楽しんでいました。次は小さな紙にビー玉を使ってモダンテクニックを行いました。マスキングテープを使い、表現を深めていきます。ビー玉に絵の具をつけてころころと転がしながら生まれる表現を楽しみました。周りの人がビー玉をジャンプさせたり絵の具のつけ方を工夫したりするのを見ながら自分の技法に取り入れていきます。これもみんなでつくることのよさです。 (石賀直之)

<u>D コース:「にじ色の国を探検しよう!」</u> 「みんなの版を並べて刷って」

「にじ色の国を探検しよう!」はパスやマーカーなどでにじの7色の配色の順番に従って、各自が画用紙に任意の絵を描き、それを切り取って、壁面やテーブルに模造紙を固定して準備したステージに貼っていきました。白いステージには一人一人の思いがならび「にじ色の国」が徐々に姿を表してきました。全体をデザインされたものを分担してつくる共同製作と違い、つくりながら、出来上がってきたものに触発されて、発想や構想が広がり、つくり続ける楽しさを味わうという「みんなでつくる意味」を体験しました。

互いに初対面の参加者同士が、「にじ色の国」が変化し、 完成していく過程を楽しみながら、心を通わせ「にじ色 の国を探検」している様子でした。





「みんなの版をならべて刷って」は、幅90cm位の長いロール版画用紙に、薄いスチレンボードを切ったり、 凸凹をつけたりして版をつくり、水性の版画用インクを使って写していく活動でした。講師の長尾先生が実演して見せると「わーっつ!きれい!」と歓声がわきおこりました。一般的な紙はんがや木版画などにおける版作りの困難さが先入観としてあったのでしょう。身近な材料で、平易に、大きな紙にダイナミックで鮮やかな色に刷り上ったことに参加者は驚かれたようです。

大きな版画用紙に鮮やかに写されていく模様に刺激を 受けながら、版の形や凸凹模様を工夫したり、色の重ね 方を工夫したり、参加者全員が、版で表すことの楽しさ を心から味わいながら熱心に活動されていました。

「秋の展覧会の学年の活動としてぜひ挑戦してみたいと思います」と喜んでいただき、とてもうれしく感じました。みんなでつくるっていいですね。 (堀井武彦)

*** 参加者の声に応えて ざっくばらん討論会・アンケートから ***

Q: 「 見栄えのよい造形活動見せる幼稚園は人気があり、指導の成果が見えにくい幼稚園は不人気。 幼稚園の先生の問題だけではないような・・・。 」

園の先生だけの問題ではない…というご指摘には大賛成です。子どもの成長を願うのは親も保育者も同じですが、願いや思いには少しズレがあるようです。しかも「見栄え」は優劣で考えます。その価値判断は気にする人が決めますから、子ども主体に考えている保育者教師にとっては大きな隔たりになって行きます。

また「見栄えがよい」ということは何も造形(図工)に限った現象ではないようです。音楽も劇も書道も…「鑑賞」できる活動のすべてに「見栄え」は付いてまわっているようです。さらに運動の世界でも個人の能力に視点を当てているようですが、「見栄え」に振り回されていることもしばしばです。つまり「見栄え」は優劣です。

造形も音楽も劇も書道も…と、表現活動をひとまとめにしてしまうと問題が残ります。造形のように「ひとりひとりの個性」が出発点のものと、音楽のようにはじめに楽譜があって、技術的にどのように表すか…というところに視点をおいているものとは違います。

それぞれの活動にはそれぞれの良さがありますから、優劣をつけられないのは当然ですし、「表現として同じ」とはいえません。

また幼稚園保育園の経営は、そうした「見栄え」(親)を気にしなければならないほど大変なことは事実です。 子どもが来なければ経営が成り立たないのですから。しかし、すべての園で「見栄え」を気にしているのではない ことはお伝えしておきます。

ご質問の内容にもどりますが、「園の先生だけの問題ではない…」という言葉にはしっかりと親の理解力や社会の動きとの関係が含まれています。そこが重要だと私も感じています。「見栄え」を気にせず、ここが大事…と子どもの造形の見方や受け止め方を親に伝えている園は少なくありません。

ぜひ、世の中の「見栄え」に流されず、子どもの個性を育て励まし、認め合える社会づくりをみんなでしませんか。 人と人とが認め合えることが「いじめ」がなくなる基盤ではないでしょうか。 (平田智久)

Q:「今の図工(造形遊び等に柱を置いた)で子ども達に造形的な力がついていくのか不安です。」

私は、次の表のような考え方を常に心がけて子どもたちの造形的な力を伸ばそうとしています。

表現の 内容 表現 の課題	材料をもと にした 造形遊び	絵に表す	立体に表す	つくりたい ものをつく る
快い触覚感 や自由な開 放感を味わ	遊す	太い筆で グルグル	ねんどの山	
材料技に自発と活動を	びやての題を材	不思議な形から	変身ねんど	
あまま現とる 表もすが あるを する を きる を きる を きる を り で きる を り で り で り で り で り で り で り で り で り で り	12/2	(いわゆる 児童画)	座っている 友だち	

横軸の「表現の内容」は、「表現の分野」と置き換えて もかまいません。従来の分かりやすい分類です。

あなたは、「ねんどで立体に表す活動」と言われたら、どのような学習を想像しますか。同じ「ねんど」という材料を使っても、様々な課題の学習が考えられます。

「快い触覚感や自由な開放感を味わう」という課題から 学習を組めば、「ねんどの山」や「どろどろねんどは気持 ちいい」、「糸や針金でねんどをスパッ!と切ろう」など、 遊び的な内容になります。 「材料や簡単な技法をもとに自分で活動を発展させる」という課題では、「おだんごを積んだ形から思いついて」とか「空想の変身生物誕生」などといった「発想力」に重点を置いた内容になります。

「ある表現方法をもとに表現する中で造形感覚を養う」という課題では、教師の、「このような表現方法を教えたい」という教師根性を発揮して動物や人物などの表現方法を学ばせる場面が多くなるでしょう。

さて、おおむね説明をしたところで、あなたの教師としての指導タイプを判定してみましょう。表の上の方に指導が偏った先生は「遊ばせ型」、下の方に偏った先生は「指導型」です。どうですか。このような考え方を年間指導計画の作成や、指導後の振り返りに生かしてみるのもおもしろいでしょう。いつも遊びでも、いつもきっちり作品づくりでも困ります。やはり、私は「バランス型」が望ましいと考えます。

また、「造形遊び」という言葉を「造形実験」や「造形研究」と置き換えて考えたり、すべての題材の中で「遊び」「実験」「研究」が子どもたちの手で行われることこそ理想なのではないでしょうか。

(北川智久)

Q:「人物が描けない子どもが増えてきた」 「写実的な表現活動に願望を持ちだした子どもといかに向き合っていけばよいのだろうか?」

『人物が描けない子どもが増えてきた』この問題の要因には,大きく次の二つがあります。すなわち,「描きたいけど,どのように描けばよいかわからない」,そして「人物を自分の絵の主題としてとらえることができない」というものです。

前者の場合,すぐに指導法と結びつけて考えがちですが,その前に子どもが取り組んでいる題材において,「人物」という対象が,彼らのあらわしたい主題に必然性があるかどうかを吟味する必要があります。つまり後者の要因との関連の上で考えていく必要があるのです。教師の「人物を描かせたい」という願いが先行しすぎることなく,子ども自身が人物に対して興味・関心を抱くことができるような題材設定が必要です。人物のどこが主題となり得るのか(例えば表情,内面,生活感など)をはっきりさせ,その上で「どう描けばよいか(あらわせばよいか)」について,子どもとの対話を通して考えていきたいものです。

次に,『高学年の子どもたちの写実に対する興味』についてです。確かに彼らは「再現期」と呼ばれるように「見たように描きたい」という願望をもつようになります。それまでの児童画らしい素朴さや多視的なもののとらえ方から脱却して,新たな表現様式の獲得を模索する時期です。ここで多くの子どもたちが,描くことに対して自信を失うようになると言われています。

このような時期の子どもたちには,次の二つの視点から指導にあたる必要があります。まず表現されるべきものは,視覚=知覚だけではなくて,「心」でもあるということ,そしてその上で,その子にとって必然性のある技術的支援を行いながらも,それをもとにして彼ら自身が自分にぴったりの方法を発見的に獲得していくようにすることです。そこでは描画材や材料の工夫も考えるようにしたいですね。 (大泉義一)

Q:「4観点も含め、活動の線引きが難しい教科の特性があり、いつも評価には頭を悩まされます。」

ここに挙げられている「評価」とは,指導要録や観点 別評価における「評価」でしょうか。あるいは日々の授 業における子どもの学習改善のための「評価」でしょう か。

前者である場合,当然ながら図画工作科に示されている「観点別評価項目」を参照する必要があります。すなわち「関心・意欲・態度」「発想・構想」「創造的技能」「鑑賞の能力」のいわゆる4観点ですが,これらは子どもの表現・鑑賞活動のプロセスをモデル化しているものとも言えます。ですから,まずはこれらのプロセスに沿って,子どもの表現・鑑賞活動のあり様を整理して考えてみてはいかがでしょう。その際に大切になるのは,これらのプロセスをその題材における具体的な子どもの姿(=目に見える形)としてとらえておくことです。例えば,『木ぎれでつくろう』という「楽しい造形活動(造形遊び)」の低学年題材における「関心・意欲・態度」の観点を子どもの姿として具現化するならば,「材料である木ぎれでいろいろな組み合わせを試している」といった具合になります。

ところが実際の子どもの学習活動(造形活動)を見ていると、これらのプロセスは一体的・総合的であり、また双方向的、行き戻りのプロセスをもっている場合がほとんどです。そこで大切になってくるのが後者の「子どもの学習改善を促す評価」という考え方で、それは「子どもを応援する評価」であるとも言えます。その立場における教師は、前者の観点をふまえながらも、全人的な態度で子どもと接することが必要です。子どもが自らのもてる力を存分に発揮することができるよう共感的に彼らの学習活動を支えてやるのです。

実は,この教師の態度こそが,先に挙げた4 観点にもとづく分析的な評価活動のベースとなるとともに,この全人的視点と分析的視点の往復運動によって,真正な評価へとアプローチすることが可能となるのです。

(大泉義一)



Q :「子どもの活動のはやさには個人差がある」 「活動をはやく終わらせ、意欲が持続しない子どもとどのように向き合えばよいのか?」

図工科の学習の場合、児童それぞれの個人の作業速度 が異なるために、どうしても進度に差が出てしまうもの です。ただし、早く終わるといってもいろいろなケース があります。

活動の内容がつくる心地よさを感じながら、軽やかに活動する質のものの場合なら、早く描き終えた児童には何枚も描いたり複数つくっていくことを提案する指導が考えられます。何枚も描きながら、自分の表現の変容していくその有様を子どもと共に確かめていくようにするとよいでしょう。

このような活動とは別にじっくりと教師が取り組ませたい内容なのにあっさりと終わらせてしまう児童が現れるときがあります。その際に、教師が「ここをこうしなさい。」といった指導をしても本人が納得していないと、心ないままただ描き加えるだけで、作品に何のよさも加わらないどころか、かえって、おかしな表現になってしまうことが多いものです。やはり、その子自身が心から「こうしてみよう。」という気もちになって描きかえたり、つくりかえたりできるようにすることが大切でしょう。

私がよくやる方法は、「できた!」と持ってきた絵を一度黒板にはって、遠くから見つめさせる方法です。「どう、(遠くから眺めて)自分で納得できているのかな?」と問いかけたり、近くにいる他の児童を呼んで「この作品がさらによくなる方法はないかな?」と聞いて有効なアドバイスをもらうようにしたりしています。鑑賞の指導と絡ませながら自分の作品を見つめ直すことで自分から気づくようにしています。

以上のようなケースでなくても、活動の内容によって は当然のように進度差ができてしまうこともよくありま す。そんなときのために、様々なショート題材を用意し ておくことも大切な教師の準備の一つでしょう。

工作で余った木切れを段ボール箱などにストックしておいて、早く終わった児童が好きなものをつくれるようにする。小さな画用紙を用意しておいて、活動が早く終わった児童からそこに「自分のキャラクター」や自分で考えたお話の絵をいくつもカラーペンなどで描き進めていく。等々、たのしみながら発想を広げられるショート題材を準備しておくとよいでしょう。 (安倍啓斎)

Q:「造形遊びって何をすればいいの?」

図画工作は子どもたちが満足できるような作品をつくったり絵を描いたりすることができるようにするための指導法が大切にされてきた時代がありました。もう10年以上前になります。もちろん現在もこの考え方は残っており、日本全体で考えるとまだ一般的な考え方といえそうです。最近はやらせっぱなしの図工からもう一度指導法を充実させて子どもたちに描き方つくり方をしっかり指導することが大切だという考え方も復活してきました。その言葉の裏には「造形遊びに対する批判」があるようです。

指導法の充実そのものは大切なことですが、やみくもに 描き方つくり方を指導するのは本来の図画工作のねらい とははずれているようです。形活動で育てるべき能力は 子どもがイメージする力と創造力です。つまり自己教育 力、自分で決定し、決定したことは責任を持って創造的 に切り開いていく力を育てることです。これが楽しい造 形活動の誕生の理由です。

ものごとを創造的に切り開いていく原動力として楽しさがあります。苦しいこともがんばれるのは根底に楽しさがあるからです。特に造形活動において楽しさは重要です。

ものを描いたりつくったりする造形活動の本来の姿を子どもにとりもどすには、やらされるのではなく、自分でやりたいことを自分で決めることが大切です。造形活動においては具体的にいうと「身の回りの材料を集め、その材料を並べたり組み合わせたりしながら自分のつくりたい物を決め、つくること」です。そして結果の作品からではなく表現活動そのものを通して子どもがなにを学んだかを大切にすることが楽しい造形活動に求められている役割だと思います。

では、具体的に何をすればよいのでしょうか?なかなか難しい質問ですね。思い切って一言で言ってみましょうか。

ずばり、「準備はしてもプランを立てない」です。 これは厳密に言うとまちがいです。本当は教師も予測と してのプランを立てるのです。しかし、プランに縛られ ては本末転倒です。プランは子どもがつくるのです。教 師が自分の立てたプランに縛られるくらいなら立てない 方がマシです。勇気を持って材料を準備し、子どもの立 てるプランに目を向けてみましょう。

(石賀直之)

サクラクレパス